

# 細菌性下痢症の発生に關与する地域特異的要因の解明

## ーインドネシア西スマトラ州パダン市を事例としてー

平成 27 年入学  
派遣先国：インドネシア  
甲斐 丞貴

キーワード：地域研究，病原細菌学，細菌性下痢症，フィールドワーク，インドネシア

### 対象とする問題の概要

インドネシアにおいて最も入院患者数が多い疾患は下痢症である。日本において下痢症で入院することはまれであることを考慮すると、インドネシアで報告されている入院を必要とする下痢症は、コレラ、細菌性赤痢、チフスなどの非常に重篤な症状を伴う細菌性下痢症ではないかと推察される。

細菌性下痢症の発生には、微生物学的要因に加えて、その地域に特異的な自然・生活環境要因、文化・社会的要因、政治・経済的要因等の地域特異的要因が大きく關与すると考えられている。しかし、インドネシアでは、これらの要因を包括的かつ定量的に行った研究は少ない。

インドネシア西スマトラ州の州都であるパダン市は、細菌性下痢症の患者が少ない地域であることが報告されており [Oyofu et al., 2002]、この地域を中心とする包括的な研究を行うことにより、インドネシアの細菌性下痢症の発生抑制に役立つ知見を得ることができると期待している。

### 研究目的

本研究の目的は、①患者情報に基づくパダン市の細菌性下痢症の現状を調査すること、②細菌性下痢症の発生に關与する可能性のある種々の環境要因の有無を調査し、パダン市の地域特異的要因を明らかにすることである。このために文献調査や患者への聞き取り調査のような従来型のフィールド調査のみならず、病原微生物学実験に基づく解析も実施する。具体的には、①では便検体中の特定の下痢原因菌の有無（すなわち感染症の有無）の確認を実施し、②では調査地における調理前と調理後の食品中の下痢原因菌を正確に定量することで、環境・食品の汚染状況および調理法の影響を明らかにする。

本研究におけるバイオメディカルなアプローチも統合した研究により明らかにする地域特異的要因は、医学分野の要求する **evidence-based medicine (EBM)** の基準をも満たしており、発展途上国の熱帯地域における有効で総合的な細菌性下痢症対策を組み立てる上での一助となるであろうと考えている。

### フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークは、パダン市のプスケスマス（写真 1）と呼ばれる地域診療所の視察を中心に行った。今回のフィールドワークから得られた知見は以下の通りである。

第 1 の知見は、カウンターパートの協力の重要性である。カウンターパートと共にパダン市の都市部と郊外のプスケスマスを視察した際に、ある診療所の院長がカウンターパートのかつての教え子だったことによって、院内の設備を見学できただけでなく、外部者ではなかなか聞くことができない細菌性下痢症に関する話を伺うことができた。

第2の知見は、現地の人々とプスケスマスとの密接な関係である。これは、2014年1月から施行されている新しい国民保険制度（BPJS Kesehatan）に大きく関連していると思われる。この制度のおかげで、患者がプスケスマスで必要な手続きを済ませていれば、申請したプスケスマスでの医療サービスが無料になるのみならず、病院でのより高度な診察が必要になった場合の医療サービスも無料になる。今後は、この国民健康保険制度の導入によるプスケスマスの地域的役割の変化と下痢症の発生との関係性も調査したいと考えている。

第3の知見は、パダン市における主要な民族であるミナン・カバウ人の料理方法である。彼らは、敬虔なイスラーム教徒が多く、食品衛生を厳しく遵守するイスラーム圏の完全加熱食習慣を持つことで知られている。ランキタン（写真2）と呼ばれる巻貝を食べた時に気付いたことだが、殻の最も上端にあたる部分（殻頂）が全て壊されていた。これは、貝の内部までしっかり火を通し、殺菌するために意図的に壊しているかと推察される。

最後に、パダン市は宗教色が強い都市であると感じた。ジャワ島と比べて、女性のヒジャブの着用率とイスラーム式挨拶の使用頻度の高さに驚いた。このことは、パダン市がジャワ島と比べてイスラーム教徒の比率が高く、ミナン・カバウ人が大多数を占める社会を形成しているからだと考えられる。

## 今後の展開・反省点

今後は、今回のフィールドワークから得られた上記の知見とアイデアをもとに、研究計画の修正を行い来年度の調査に役立てたい。

重要な反省点が2つある。第1点目は、今回の渡航の前にビザの申請に必要な書類を全て揃えることができず、ビザを取得できなかったことである。その原因は、これまで提出の必要がなかった「ジャカルタ入国管理総局からの査証発給許可証」の提出を求められたことであった。

第2点目は、フィールドワークと並行して、アンダラス大学においてインドネシア語のクラス（写真3）を履修したが、研究活動に必要なレベルのインドネシア語を習得することができなかったことである。語学習得には時間がかかるということを再認識した。次回の調査まで、語学学習を継続したい。さらに、スムーズな研究活動を行うために現地の人々と親密なコミュニケーションを図ることが重要であるため、パダン市の現地語であるミナン語の習得も目指したい。



写真1 プスケスマスの看板と建物の外観



写真2 ランキタンと呼ばれる巻貝  
(殻頂が壊れているのが  
確認できる)



写真3 アンダラス大学のインドネシア語  
クラスの Sri Wahyuni 先生と撮影